
小さな恋心

華帆

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

小さな恋心

【Nコード】

N9749H

【作者名】

華帆

【あらすじ】

中一のある日の出来事。その日はとても寒い日だった。その日、ある人に助けられ、冷えきった体と心があたたまった。同時に、小さな恋心に火がついたんだ……。

1：プロローグ（前書き）

初めての小説投稿です！完結するまで頑張りますので、よろしくお
願いします。

1：プロローグ

私は、この頃まで恋愛に興味はなかった。

だけど……ふとしたキツカケで、私の恋心に火がついたんだ……。

冬も近くなってきた、寒さが私を襲ったあの日。

あの時、私に手を差し伸べてくれた人に……私は恋をした。

一週間前の事。

放課後、図書委員会の集まりで、帰るのが遅くなった私は、急いで階段を下っていた。

一年生の教室は四階。

四階の、私のクラス　一年二組で集まりをしていた。

この日は何故か、とても寒い日で足がフラフラしてしまう程だった。外に出るともっと寒くて、手に息をはきながら歩いていった。

時刻は六時。

もう部活が終わる時間だ。

みんなさっさと帰ってしまったのか、校庭には誰もいなかった。

強い風が吹き、私は座り込んでしまい、立てなくなっていた。

五分ぐらい経った頃、私の目の前に、誰かが手を差し伸べてくれた。手をつかみ、ゆっくり立ち上がりながら顔を見た。

私と同じで、背は高くもないけど低くもない男子だった。

「あつ、ありがとうございます。」

小さな声で私は言った。

見慣れない顔だし、一年生ではないだろう。

三年生は部活を引退してるから、こんな時間まで残らない。だから二年生だろう。

「どういたしまして。家まで一人で帰れる？」

「はい……。多分大丈夫です……。」

そう言うとはぺこっとお辞儀をして、手を離し、その場から走り去ってしまった。

家に帰ったら、バックに付けておいたイルカのキーホルダーがなかったので落としてしまったんだろう。

その日から私は……。その人を目で追うようになった。

そして、その日に私の……。恋心に火がついた。

1：プロローグ（後書き）

良ければ御感想、お願い致します！

2：再会

「うわぁ~~~~っ！やばっ！」

私の名前は、神崎由芽^{かんさきゆめ}

中学一年生。

「もぉーっ！冬香ちゃんったら何で起こしてくれなかったのお！？」

「由芽の事なんかーいも起こしたつつうの！」

この子の名前は、沢野冬香^{さわのふゆか}

私の一つ年上。

幼い頃に、冬香ちゃんの両親が亡くなってしまった。

私と冬香ちゃんは、仲が良かったから、私の家であずかる事になったんだ。

「由芽！私もう行くからね！」

ボタン

「ちょぉーっ！……ってもう八時じゃん！」

うざいぐらいに太陽の光が眩しい。

タンスから制服をだし、ボタンをしながら、冬香が作ってくれた朝ご飯のパンを口に押し込む。

お母さんは、朝早くから仕事だし、お父さんも仕事。

だから、朝ご飯はいつも冬香がつくる。

バックの中に教科書やらノートをつめて、バックを片手で持ち、階段を下る。

顔を大急ぎで洗い、洗面所から出て、ようやく玄関に行く。

「あー！そういえば今日英語の辞書必要なんだあ…バックに入れてないし……！」

……。

まっ、いつか！

靴を適当に履き、急いで家を出た。

家から学校まで走って十分。

現在の時刻八時十五分。
朝休みは八時三十分に終わる。
間に合う！そう思った由芽は、体育祭で走った時よりもはやく走った。

ガラガラガラ！

時刻は八時二十六分！

間に合ったあ！

「おはよおー由芽！すぐ席についちゃいな！」

「あつ……おふあ……よおーつ……ま……いー……」

由芽は、必死に息をしながら席についた。

今の子は、よしだまい吉田舞

私の親友！

ガラガラ！

「おはようございます！日直！号令を！」

一年二組の担任の井上先生が入ってきた。歳は四十ぐらいの男性で、格好いいわけではない。

「起立！礼！着席」

日直の号令が終わると、先生は何故かコクコクとうなずいて、真剣な顔になった。

「ええーつと……近頃、不審者がこの辺で出ているらしいので、皆さん気をつけてくださいねー」

「ハイ」

みんな適当に返事をして、次の時間の英語の用意をした。

そつえばさつづま辞書……。

隣の席の佐藤雄麻君は私が忘れ物をする、いつもバカにしてくる。バカだからしょうがないんだけど……。

だから佐藤君には借りたくないし、言いたくないなあ……。

「よし！朝の会は終わり！日直号令！」

「起立！礼！着席！」

号令が終わったと同時に、みんな自由行動をとった。

朝の会が終わると、十分間の休憩時間に入る。

「やべー……美術の教科書忘れたあ……」

廊下から聞き覚えのある声が聞こえた。

振り返ると、この前助けてくれた先輩だった。

お礼言つてこなきゃ……！

由芽は、椅子から立ち上がり、廊下まで来た。

「あ……のっ！」

大きい声を出して言ったら、廊下にいる人全員が振り向いた。

み……みんなの視線が痛い。

「この前、助けてもらった者ですつつっ！」

そう言くと先輩は、ああ。と言つてにつこり笑顔をつくってくれた。

「だったから……そのおー……ありがとうございますっ！……え

えとっ……それで、何かしてほしい事とかあ……ありますか？」

途切れ途切れの言葉でそう言った。

「うーん……特にないけど。……あつ、美術の教科書かして」

「今……ですか？」

「うん」

由芽は、自分のバックに間違えて入れてしまった美術の教科書を先輩に渡し、ペコっとお辞儀した。

「ありがとう！またあとで教室に寄るね！」

二年生の教室は三階。

美術室は四階だからここまで来たんだろう。

「おー？良かったじゃん佑介ゆうすけ！」

と、いきなり女子の先輩が入ってきて、私の肩にポンと手をおいた。

「ありがとちゃん ところでさっき、オロオロしてたけど……なん

かお困り？」

女子の先輩が綺麗で肩までつく高さの栗色の髪を触りながら、私に問い掛けてきた。

私の髪なんて、茶色がちよつと混ざつた短い黒い髪の毛を二つに結んでいて地味なのに……羨ましい。

「あ……えつと、英語の辞書忘れちゃつて……」

「あつ、そうなの？俺のかそうか？」

「えつ……でも……」

と、オロオロしている間に、先輩は辞書を取りに行つてしまった。すると、さっきの女子の先輩が、肩に手をおいてきた。

「私の名前、伊藤凛いとつりんつて言うの！貴方は？」

「私は、神崎由芽です。」

「そつかあー！じゃあ由芽子ヨロシク」

「由芽子……？」

「ん？気に入らない？」

「いえ……」

そう言つてゐる間に先輩が戻つて来た。

「どうぞーじゃ、俺行くわ！凛も行くぞ！」

「ハーイ。またねー由芽子！」

「あーはい！」

そう言つて先輩は行つてしまったので、私も自分の席に戻つた。そしたら……。

佐藤雄麻がこつちをジロジロ見ている。

「なに？」

私が言つと、佐藤君はにーっと笑つた。

「今の先輩、好きなの？」

と聞いてきた。

私は顔が真っ赤になるのを感じて、うつむいた。

「ふ~~~~ん」

と、佐藤君は言つた。

「でも、あの先輩って伊藤先輩と付き合つてるんだぜ？」

え？

3：一安心

それからの授業には全然力が入らなかった。

あの二人……付き合ってるんだ……。

まあ、私みたいな子相手にされないのは当たり前だけど。

キンコンカーンコン

四時間目の終わりを告げるチャイムが鳴った。

「起立！礼！着席！」

日直の挨拶が終わったと同時に、みんな動きだした。

そういえば辞書返してない！

どーしよお……。

何組かもわからないし……。

名前もわかんないし……！！

「由芽子……！ちわーっす」

あっ！伊藤先輩だ！

「先輩！こんにちわ！あの……さっきの男子の先輩の名前ってわか

りますか？」

「あー！新垣佑介にいがきゆうすけね！」

あっ……。

そういえばあの時、佑介って言ってたもんね……！

伊藤先輩に聞きたいなあ……付き合っているのか……！

「ありがとうございます！あの……。伊藤先輩って彼氏いますか？」

「彼氏……？いない、いない。好きな人はいんだけど……。そいつ彼

女いるし」

……？

あれ？

付き合っていないの？！

いよっしやあああっ！

「私！先輩の恋、応援します！」

そう言う凛は、由芽の手を握り、顔を輝かせた。

「あつりがちよー！！じゃあ、私も由芽子が好きな人いるんだつたら相談のる！いるの？」

「……あ、はい。気になつてる人なら……。」

「マジ！？じゃあ今日携帯にメールするから、アド教えて！」

「はいつつつ！」

由芽は、ポケットに入れておいた小さい紙に、アドレスを書いて渡した。

「あつ！辞書返しといてあげるわ！じゃあねーん！」

凛は、辞書を掴み取り、そのまま走り去ってしまった。

由芽は、スキップしながら給食の準備に入った。

4：不安倍增

「はぁ〜疲れた!」

自分の部屋に着くと、ため息をつくと同時にバックを投げた。

ゴロンとベットに転がり、一息ついた。

付き合ってなくて良かったぁ……。

砂時計を見ながら由芽は思った。

ブーブー

携帯が鳴っている。

マナーモードにしてあるので、音は鳴らない。

バイブ音である。

携帯を持ち、携帯を開くと、新着メール一件と出ていた。

件名が凜です!と書いてあるから、伊藤先輩だとすぐわかった。

本文は

ヤッホー

凜でえいーす!由芽子だよねえーん?

そうそう!

あたしの好きな人は〜!

その次の文に目を疑った。

佑介なんだ!!!

そこで文は終わっている。

伊藤先輩は……新垣先輩の事……!

応援できないよぉ……!!

ポタポタと涙が、携帯の画面に落ちていく。

視界も薄れてきた。

顔……洗おう……。

洗面所に行き、自分専用のタオルを棚から取り出した。
ピシャピシャ！！

水を顔に押しつけるようにつけ、タオルで顔をゴシゴシ拭いた。
勝ち目ないよお……！！

そんな思いで胸がいつぱいだった。

数分経ち、自分の部屋に戻り、メールの返信をした。

こんばんわあ

由芽です。

そうなんですかあー？

頑張ってください

そう送った。

携帯を閉じ、自分の部屋のベランダに出た。

もう冬に近づいてきて、外は暗い。

だけど、風が気持ち良い。

悲しみでうまっていた心を落ち着かせてくれた。

「ありがとう……！」

そう呟いて、外を見渡していると 信じられない光景。

信じたくない光景が目飛び込んできた。

冬香と佑介が、手をつないで歩いていた。

5：止められない想い

「たっだいま」

冬香ちゃんのご機嫌の良い声をだして、私の部屋にノックも無しで入って来た。

「おかえりなさい。機嫌良いね？どうしたの？」

手をつないだ現場を見てから、完全に頭がパニックになっていたけど、伊藤先輩とのメールのやりとりで、少し落ち着いた。

伊藤先輩は、お風呂に入ってくる。と行ってしまったし、今まで読書をしていた。

「エヘヘ わかるー？実はあ……彼氏に指輪もらったんだあ おもちゃのだけど！」

ジャーン！つと言って、冬香ちゃんは指輪を見せ付けた。

冬香ちゃんの大好きな色 薄いピンク色の指輪だ。

「冬香ちゃん、彼氏いたんだ？誰ー？」

それとなく聞くと、冬香ちゃんは目を輝かせて言った。

「新垣佑介って言うの！私から告白したら、すぐOKしてくれたの！ー！うふふふん」

うざいくらいニコニコ笑顔で言った。

やっぱり……付き合ってるんだ……。

……。

「それでね！明日学校休みじゃん？佑介が家に遊びにくるの！」

「……え？」

「だから由芽！邪魔しないでよね！？」

冬香ちゃんは、そう言って部屋を出ていった。

明日……来るんだ……？

そっか……。

翌日。

ピンポン！

お昼ご飯を、台所で片付けていると、インターホンが鳴った。冬香ちゃんは、慌ただしく玄関に行った。

玄関のドアが開く音がする。

なんだか話し声がする。

声がどんどん近づいてくる。

台所とリビングはつながっている。

だから、リビングに来るつもりなんだろう。

ガチャ

リビングのドアが開いた。

「おおー、綺麗だなあ。……あれ？神崎さん？」

「あ……こんにちは。ごゆっくりして行って下さいね」

新垣先輩と冬香ちゃんが並んでいるのを、見ていたくない……！！

「あつ！待って由芽！お茶とお菓子出してくれる？」

冬香ちゃんがそう言うなら……出すしかないよね……。

テンション低めでお茶を出した。

お菓子あつたつけ？

「冬香の部屋は綺麗なのか？」

「佑介のために綺麗にしたわよ！」

リビングで楽しそうに話す声が聞こえる。

羨ましすぎる……！

あれ？ここにクッキー置いておいたのに……ない！

どうしましょ……。

お菓子……待ってるよね？

じゃあ、作っちゃおうかな？クッキー。

アピールできるチャンスだし！

「ありゃりゃ……」

ちよつと固いし焦げてるし！

星やハートの形のクッキーを作った。

食べれるけど……大丈夫かな？作りすぎちゃったし！

まあいいやー！

「お……お待たせしました。お菓子なかったから、作っちゃった」

「おー、ありがとー由芽！」

「おいしそうだね、ありがとう」

やば……涙でてきそう。

「うん！美味しい！」

新垣先輩が、そう言っではくぱく食べてる。

すごく嬉しい……！！

泣いちゃいそう。

「あ……部屋に戻るね！二人ともごゆつくり！」

あわてて部屋に戻った。

「ふう……」

やっぱり、私……

諦められないよ……！

6：小さな火花

ブーブー

携帯が鳴ってる……。

メールかな？

携帯をゆっくり開いて見ると、伊藤先輩からのメールだった。

こんちわー

今さあー、暇だから由芽子の家に来ちゃったあゝ！

えー！！

私は、部屋から飛び出し、玄関まで走り、荒い息を整えてドアを開けた。

「ヤッホー」

手をひらひら振って、玄関に入ってきた。

「こんにちは。じゃあ……私の部屋二階ですので、案内しますつてえ！」

言い終わらないうちに、伊藤先輩が、リビングに向かっている。新垣先輩と会わせたらやばいよね？

冬香ちゃんもいるし。

「先輩！こつちですよー！？」

「えー？だつてリビングでくつろぎたいしー」

ガチャ

リビングのドアを開けてしまった！

「ヤッホー 佑介に……ドロボー猫」

伊藤先輩が満面の笑みで言った。

「誰がドロボー猫ですつてえー！！？」

冬香ちゃんが、伊藤先輩に怒鳴り、私の方を睨んだ。

「由芽っつ！邪魔しないでって言ったわよね！？」

「う、ごめんなさい……」

私はぺこぺこ頭を下げた。

伊藤先輩は、表情を変えない。

一体、どういう事なの？

新垣先輩は固まってるし。

「そのままの意味よー？ドロボー猫さん あっ！それとぉー、邪魔をしたのは由芽子じゃないしいー、あたしの事だって邪魔したんだからさぁ……人の事言えないっしょぉー？」

「……」

伊藤先輩は、私の方を向いてピースした。

冬香ちゃんは、顔を真っ赤にして反論した。

「うっ、うるさい！！いいから帰って！迷惑だわ！」

「ここは由芽子の家でしょ？あなたに帰ってって言われてもねえ！」

な……何でこんなに仲が悪いの！？

7：過去

「アハハ―！ごめんね由芽子」

「いえ……」

あの後、冬香ちゃんは手まで出そうとしたし、私が思いつきり怒鳴りつけたらみんな黙った。

これ以上うるさくされたら迷惑だし、伊藤先輩を私の部屋に連れていった。

「そんな怒らないでよおー！あつ！そーそー。由芽子、アンタ佑介の事好きなの？」

「……え？」

うそ？なんでそんな事？

「何ですか……？」

「んー？いやあ……何となく……。で？どーなの？」

伊藤先輩が真剣な表情で私を見る。

「………そ、そんなわけないですよおー？アハハ―……」

「そ？わかった」

伊藤先輩はすぐに満面の笑みを浮かべた。

「じゃあ……由芽子の言葉、信じるから」

伊藤先輩はそう言ってベットに寝転んだ。

「……あたしさあー佑介と幼なじみでさあー……。小学生の頃から好きだったんだあー……。中一の時、佑介に告ったらOKしてくれたんだあ……。すっごい嬉しかった」

伊藤先輩は弱々しい声で言った。

「付き合って一カ月くらい経った時に、年下の子に告られたんだあ……。その時、仲が良かった冬香に相談したの。相談した次の日、私が年下の子を口説いたって噂が流れててさあー……。そしたら佑介に、友達の間までいようって言われちゃってさ……。そしたら冬香と佑介が付き合う事になってたんだあ……」

「え……」

「冬香もさ、佑介の事が好きだったらいい。噂を流したのも冬香らしいんだけど……。だから、ドロボー猫って言ってるんだあ……」

「……」

「アハハ、ごめんごめん。空気重くなっちゃったねえー！」

伊藤先輩は手をひらひら振って笑っていた。

つくり笑いなのがすぐわかった。

「先輩は……噂の事、否定しなかったんですか？」

「否定……できなかった。……佑介が、噂を信じたって事にショック受けてさ……」

伊藤先輩は、下を向いてしまった。

そんな重い空気を消し去るように、伊藤先輩は立ち上がった。

「帰るわー！暗くなってきたしいー！じゃっ！」

伊藤先輩は、そのまま部屋を出て行ってしまった。

8：協力関係

「おはよー由芽！…なんか元気ないね？」

教室に入ると、舞が飛び付いてきた。

目をクリクリさせていて可愛い。

「そう？疲れてるだけだよ、多分。」

そう答えると、舞は安心した様子で離れた。

「なら良いけど。もうすぐチャイムも鳴るし！また後でねー」

舞はそう言って席についた。

私も自分の席についた。

教科書やノートを引き出しに入れ、先生が来るのを待った。

「おい、神崎」

隣の席の佐藤に声を掛けられ、私は適当に返事をした。

「話あるから放課後、教室に残れ」

「え……うん」

私の返事と同時に、先生が教室に入ってきた。

話ってなんだろう？

伊藤先輩の事……かな？

休み時間になり、その事を舞に話すと、一瞬黙り込んだけど、すぐに顔を輝かせた。

「告白じゃん！ー！？」

「ばっ！ばか！んなわけないでしょ！？」

私は、軽く舞の背中を叩き、下を向いた。

「いやあー？わかんないかもよあー？楽しみー」

面白がつてるし……まあ良いけど。

でも、佐藤のさっきの顔を見たら、告白かも？って思っちゃうよね？
なんかときどきしてきたあ！

「起立！礼！さようなら！」

号令が終わると、各自さまざまな行動をとった。

舞はテニス部だ。

これから練習もあるからその準備をしている。

私は部活に入っていないから、約束通り、教室にいる事にした。

「由芽ーまた明日ねー」

そう言って教室を出ていった。

それから五分が経った頃、教室には私と佐藤が残っていた。

お互い黙っていた。

そんな空気を振り払うように、佐藤が話を切り出した。

「あのさ……神崎は新垣先輩の事が好きなんだろ？」

「う……うん」

なんかドキドキする。

「伊藤先輩もさ、新垣先輩の事……好きなの知ってる？」

「し……知ってるよ？」

ぎこちない返事を返す。

「実はさ……俺、伊藤先輩　凜の事が好きなんだ」

「ふーん……って……ええ！？」

じゃあ、伊藤先輩に告白した年下の人って佐藤！？

「俺と凜はさ、結構仲良かったんだ。そしたら、次第に凜に惹かれていったさ……」

そうなんだ……

「だからさ！俺はお前に協力するから　」

「私もアンタに協力しろ……って事？」

「うん……」

でも、そしたら私……冬香ちゃんにも、伊藤先輩にも恨まれそう……。

それに……伊藤先輩にこの前、新垣先輩の事、好きじゃないって言

っちゃったし。

「頼む!!」

佐藤は土下座してきた。

そこまでの……？

なんか可哀相になつてきたなあ……。

「……わかった！協力する！それで良い？」

「あっありがとう!!」

佐藤は体を起こして、私の手を両手で掴んできた。

「ちよっ！何すんのよ!？」

「あ……ゴメン」

でも、佐藤ったらちよつと可愛いかもって思った。

9：胸のドキドキ

「ふうーん……そうなんだー」

佐藤に、新垣先輩を好きになった理由や、伊藤先輩と冬香ちゃんの関係が簡単に説明した。

佐藤は、ふうー。と一息ついて、私を見た。

「じゃ、俺部活行くわ！」

「え？部活入ってんの？」

「ああ。野球部！じゃあなー！」

佐藤はそのまま部活に向かってしまった。

新垣先輩は部活入ってるのかな？

「ハアー……」

教室から出て、階段を静かに降りた。

二階にある図書室に向かった。

夕方の図書室は人があまりいなくて好き。

静かに図書室に入り、辺りを見回した。

誰もいないかなー？

いないよねー！

勝手に納得して、本を探しはじめた。

適当に本をとって、椅子に座り、読もうとしたら、隣に誰かが座った。

え？おばけ！？

恐る恐る横を見ると、新垣先輩がにこーと笑っていた。

「こんにちは、神崎さん」

「こつ……ここにちは……」

ドキドキしすぎて変な言葉になっちゃったし！

心臓の音がうるさい。

静まれ静まれ静まれ！

「大丈夫？顔真っ赤だよ？」

新垣先輩が顔を覗き込んできた。

「は……はいっ！大丈夫です！」

「そう？なら良かった」

新垣先輩は、教科書とノートを取り出し、勉強をはじめた。

「先輩は……よくここに来るんですか？」

新垣先輩は顔をあげて頷いた。

「毎日来るよ。ここだと落ち着いて勉強できるし、夕方の図書室は好きなんだ」

新垣先輩はそう言っただけで微笑んだ。

素敵！！！！！！

「私も……誰もいない夕方の図書室が好きで、よく来るんですよ」

「そうなの？気が合うね……。神崎さんも一緒に勉強する？」

「え。良いんですか？」

もちろん！という風に頷いてくれた。

私も数学の教科書とノートを取り出した。

いつの間にか、胸のドキドキが消えていた。

10：行かないで…（前書き）

更新遅れてしまいました、すみません、

10：行かないで…

それから私は、毎日図書室に通っていた。

近くにいるだけでもドキドキするのに、お話までできちゃったら…

…死んでも良いぐらい！！

そんなルンルン気分で、今日も図書室に行った。

ガラガラガラ

中には誰もいなかった。

いつもなら、私より先に来ているはずなのに……。

とりあえず、私は数学の教科書とノートに、筆記用具を出した。

今日の宿題を進めていく。

あつ、ここわかんない……。

先輩が来たら教えてもらおう

ガラガラガラ

「……！」

新垣先輩が来たと思い、椅子から立ち上がると、扉から出てきたのは……

佐藤だった。

「佑介……ちよつと良い？」

伊藤凜が、真剣な表情で佑介に言った。

帰りの会が終わり、みんな色々な行動をとっていた。

ある人は部活の準備。

ある人は委員会の準備。

ある人は帰る準備。

など、様々だ。

その中で凜は、強引に、佑介を屋上まで連れていった。

「話ってなんだよ……」

凜のあまりの真剣な表情に、驚きながら話を切り出した。

「……………」

凜は黙っていた。

十分経っても話しださない。

佑介は、ハァーと言い、屋上から出ようとした。

その時、

「どこ行くの？」

凜の冷えきった声が聞こえた。

佑介は、凜に向き直った。

「関係ない」

「由芽子の所？」

「お前に言う筋合いはない」

「由芽子と毎日会っているそうだけど、何してるの？」

「何でも良いだろ」

「彼女の事、放っておいて良いの？」

「……………」

佑介は、凜に背を向け、屋上から出ようとした。

「待ちなさいよ」

凜の声があがっている。

佑介は無視して出ようとした。

その時、凜に思いつきり腕を捕まれ、強引に唇を重ねられた。

11：疑問

「なっ！何すんだあほっ！！」

佑介は強引に体を離れた。

凜はそのまま下を向いていた。

「とにかく……俺、もう行くから！！」

「まっ！待ってよ！」

「なんだよ！！！」

「図書室には……行っちゃだめ……！！」

凜は小さいけれど迫力のある声で言った。

「なん……で」

「由芽子に告白したい人がいるから……！！だから！！一人にさせてあげて……！！」

凜はそう言つて、佑介の腕を掴んだ。

佑介は、抵抗する事ができなかった。

「どうして」

「別に……。ここに来いって頼まれたんだよ」

佐藤はそう言つて、私の真っ正面に座った。

「お前こそ、何してんの？」

「見てわかんない？お勉強中！」

「ふうん……」

興味の無いような返事を返してきた。

それから、少し時間が経った頃、佐藤が口を開いた。

「ここで……新垣先輩と会ってたんじゃないのか？」

12：それぞれの想い

佑介は階段をゆっくり下って行った。

あれから凜に引き止められたが、帰る。と言って抜け出した。教室に忘れてしまったバツクを手に取り、廊下を歩いた。

佑介が向かった先は、図書室だった。

ドアノブに手をかけ、入ろうとした瞬間、

「佑介？」

後ろから、聞き覚えのある声がした。

振り向くと、冬香が不思議そうな顔をしていた。

凜じゃなかった事に安心して、ほっとした。

「何してるの？」

冬香は首を傾げて聞いてくる。

その仕草に、つい顔が赤くなってしまい、顔を手で隠しながら答えた。

「いや……それより、一緒に帰ろう？」

「うん……いいけど……どうして顔、隠してるの？」

悪戯っぽい声で聞いてくるのに、また顔を赤くした。

「わかったあゝ 照れてるんでしょー？可愛いー」

「う……うるさい！とにかく帰るぞ！」

冬香はハイイと言って佑介の横に立った。

「……そんなの、お前が可愛いからに決まってるだろ……」

小声で言うつと、冬香は照れた顔を隠さず、

「ありがとう」

と、最高の笑みで言った。

二人は手をつなぎ、階段を下って行った。

「　　！！」

見てしまった。

見たくない光景を、見てしまった。

早く階段を下ろう。

そう思っているのに、凜の足は動かない。

嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ！！！！

雄麻が冬香と仲良く話しているの……見たくなかった。

だから、早く階段を下ろうって……！！

なのに、足は動かない。

呼吸が乱れてくるのを感じる。

手をつないで、幸せそうに歩く二人なんか見たくない！！

咄嗟に、凜は走りだした。

階段を昇って昇って……一年生の教室に逃げ込んだ。

何組かはわからない。

だけど、そんなのどうでもいい。

体の震えが止まらない！

止まれ止まれ止まれ！！！！

そう願いながら凜は、ぼたぼたを涙を流した。

「　　凜？」

誰かの声が聞こえた。

頭がぼーっとして、よくわからない。

顔をあげると、雄麻に似た少年が、手を差し伸べていた。

「　　え？」

何で、そんな事を佐藤が知ってるのよ？

その気持ちを悟ったのか、佐藤は静かに口を開いた。

「凜から聞いた。　　いや、凜から俺が聞き出したんだ」

「ど、どういう事……?」

私はおそろおそろ聞くと、

「好きだから……神崎の事」

佐藤がそう言ったと同時に、図書室の扉の、汚れた窓から、新垣先輩の姿があった。

来てくれた……!?

私は、今の状況を忘れて、ドアを開けた。

そこで見たのは 新垣先輩と冬香ちゃんが、手をつないで階段を下る所。

わかってはいた。

二人は付き合ってるんだから……!!

だけど !

悲しみが怒りが混じり、私はあてもなく走りだした。

13：救いの手

「どうして……雄麻が？」

凜は立ち上がり、自分より少し背の高い雄麻を見た。

「いや……神崎の事を追い掛けてたら……凜がいたからさ」

雄麻は、これまでであったことをゆっくり話した。

凜は何度も頷き、最後はため息をもらした。

「やっぱり、好きなんだね……佑介の事」

凜は、雄麻に背をむけた。

凜の目には、校庭で野球ボールを拾う姿や、サーブミスして注意されているテニス部の子がうつっていた。

しばらく二人は黙っていた。

その沈黙をやぶるように、凜は振り返り、作り笑いを浮かべた。

「よしっ！帰るぞ！雄麻！」

雄麻の背中を軽く叩いて、凜は歩きだした。

雄麻は、凜の淋しそうな背中に、何もする事ができないのだろうか、と、心の中で何度も、自問自答を繰り返していた。

雄麻は、凜の肩に手を置き、小さな声でありがとう、と、呟いた。

凜は、振り返り、何が？と首を傾げた。

「俺に、告白できるように新垣先輩の事を引き止めてくれたし……俺を、勇気づけてくれたから」

雄麻はほほ笑み、凜も自然とほほえんだ。

「ハア……………ハア」

ここはどこだろうと思いつつ、私は、呼吸を整えた。

無意識に走っていた為、ここがどこなのかわからなくなっていた。

あまり、人通りの少ない道路で、ボロボロの家や、荒らされたのか

よくわからない公園しかなかった。

こんな場所来たことがなく、どうしようもない気持ちになった。
携帯は家にある。

連絡するための手段がない。

仕方なく、荒らされたのかよくわからない公園のベンチに座り、頭を抱えた。

辺りはもう暗い。

誰も人がいないし、歩く力も残ってない。

どうしようかな、と思っていると、

「由芽……！？」

遠くの方から、そんな声が聞こえた。

周りに目をやっても、姿が見当たらない。

「ゆーめ！」

視界にいきなり、舞が入ってきた。

14：懐かしい光景

「ほんつとにありがとう！舞！」

どういたしまして、と言つて、舞は靴を脱ぎ、廊下を歩きだした。私も舞に続き、歩き始めた。

ここは舞のマンション。

たまたま舞が、犬の散歩の途中に私を見つけてくれたおかげで、私はとても救われた感じになった。

「ただいまー！お母さん！」

舞は、リビングのドアを開けて、そのままソファに転がるように座った。

「おかえりなさい。　あら？由芽ちゃんいらっしやい。久しぶりねー！小学校以来かしらあ？」

舞のお母さんがキッチンから顔を出し、私を見て、にっこりほほ笑みながら手を降ってくれた。

私は軽く頭を下げ、ゆっくり顔をあげた。

「お邪魔します。本当に久しぶりですねー」

そう言いながら、私は近くにあった椅子に腰をおろした。

そうねー、と言いながら、舞のお母さんはキッチンに戻った。

舞も、そういえばそうね、と言い、冷蔵庫を開け、顔を近付けていた。

舞の愛犬チエリーも、ワン！と吠えて、私の周りもぐるぐる回った。小学生の頃は、よく来ていたけれど、ここ最近、あまり遊びに来なかった為、舞達も嬉しそうだ。

「あーねー由芽ー！今日泊まっていきなよ！明日休みだし」

舞は、冷蔵庫から取り出したオレンジジュースを、コップに注ぎながら、明るい声で言った。

舞のお母さんも賛成の声をあげてくれた。

チエリーも嬉しそうにワンワンなっている。

私も、舞の家に泊まりたいなあ、と思っていたし、お言葉に甘えようと思った。

「じゃあ……泊まっちゃおっかな」

私がぼつりと呟くと同時に、舞のお母さんが、夕食の、スパゲッティミートソースと、コーンスープに、美味しそうなマカロニサラダを出してくれた。

「よしっ！決まり！じゃあ食べよっか、由芽？」

「うん！ありがとう」

そう言つて、みんなでいただきますをして、食べ始めた。

舞のお母さんが作る料理も久しぶりだなあと思いながら、コーンスープを口に運んだ。

「じゃあ、由芽！明日さ、一緒に出かけない？新しくできた可愛いお店があるらしいから！」

舞は、スパゲッティミートソースを、口に運びながら言った。

「口にもものを入れながら話さないの！」

舞のお母さんが困った顔をして言うのに対し、舌を出しておどけている姿にまたまた困る舞のお母さん。

これを見るのも久しぶりだなあ……。

何もかも懐かしく感じながら、マカロニサラダに手をのばした。

「うん、いいよ 私も行つてみたいし」

舞は、コーンスープを飲みながら微笑んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9749h/>

小さな恋心

2010年10月14日13時39分発行